

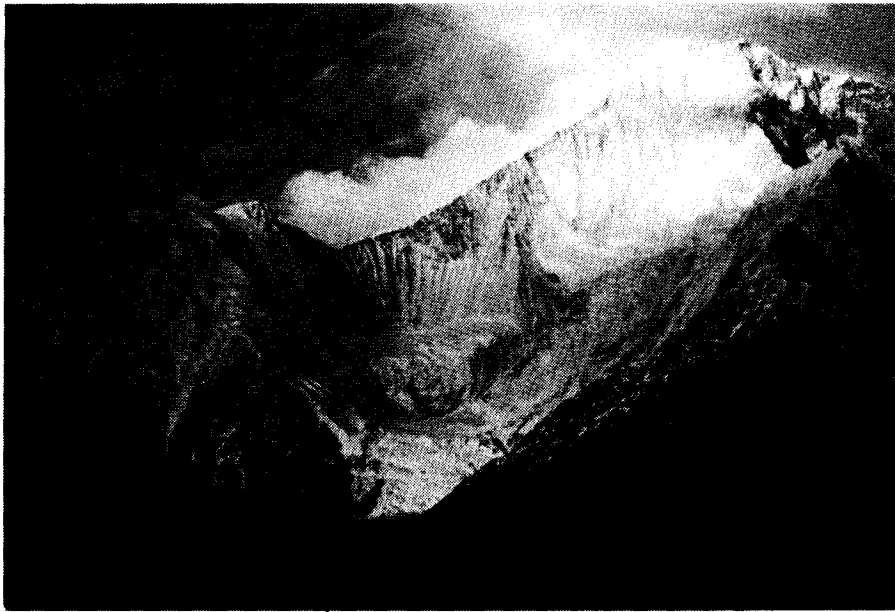


# JAC Hiroshima

社団法人日本山岳会広島支部支部報 第2号 1999年9月10日発行

発行人；平井 剛、 編集人；豊たわし、吉村 千春 日本山岳会広島支部事務局

〒730-0806 広島市中区西十日市町 1-13 (有) アガパン内 tel; (082) 296-0996 fax; (082) 296-0997



ミヰコカ峰(7,556m)の勇姿。頂上に右上するのが北西稜。真ん中の稜が南西稜（撮影；吉村千春、本文7ページ参照）

## 目 次

- |                           |                             |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1、高見和成さんを偲ぶ 種村 重明 p 2     | 5、楽しい山登りのための医学講座②大田 祥子 p16  |
| 2、年次晩餐会に出席して泉尾忠 p4        | 6、広島支部平成11年度上半期活動報告 事務局 p17 |
| 3、文化部行事報告 西条歴史散歩 p 4      | 7、同、登山活動と会員の海外山行 事務局 p18    |
| ～山と酒蔵を訪ね行く～ 兼森 路子         | 8、文化部だより 文化部 p19            |
| 4、支部員海外山行動向               | 9、事務局だより 事務局 p19            |
| (1)ミヰコカの咆哮① 吉村 千春 p 7     |                             |
| (2)カダバフィン島遠征(下)新山 まゆみ p 8 |                             |
| (3)パキスタンの秘境を訪ねて② 平井 剛 p15 |                             |

## 1、高見和成さんを偲ぶ

～一周忌法要・偲ぶ会のことども～

種村 重明

2月21日(日)12:00、廿日市市天神、正覚院で高見さんの一周忌法要。途上で上村芳枝さんに会い、彼女は献花、私は供物を調べて参列、既に斎藤惇生JAC会長、泉尾忠JAC広島支部長ら着座、右に山の会のメンバーとその知友、左に御遺族と進行役、ホビー仲間の女性たちなど満堂50人近い。

楽の音、大きんとともにしめやかに法事が始まる。一座のもの、K. TAKAMIの名を世界に知らしめた在りし日の活躍を懐く。斎藤会長のことばの中で、中国人隊員からカオチェンと呼ばれて親しまれていたなど、往事のエピソードが語られた。

その後、次女美世さんとともに眠る境内の墓碑に回る。戒名は「和光成観居士」香華参拝。墓前から穏やかな瀬戸内を俯瞰すれば、厳島、江田島の遙かかなたには故郷四国の山なみ。

続いて信徒会館に下り、お斎をいただく。遺児を励まし、夫人を労い、母おうなを慰め、思い出話に時を忘れる。ただ慌ただしく、ひたむきに人の2倍も3倍もの人生を駆け抜けた故人には、先刻の読経、理趣経にふさわしく、色、声、香、味、触などの清浄を求めて有頂天に遊ぶ諸行だったのだろうなどと話し合う。

「生きるよと死ぬを一字にかさね、夕焼け雲を這わせたら、花のようにも読めてきた。」

(水上 勉ニヨル)

合 掌

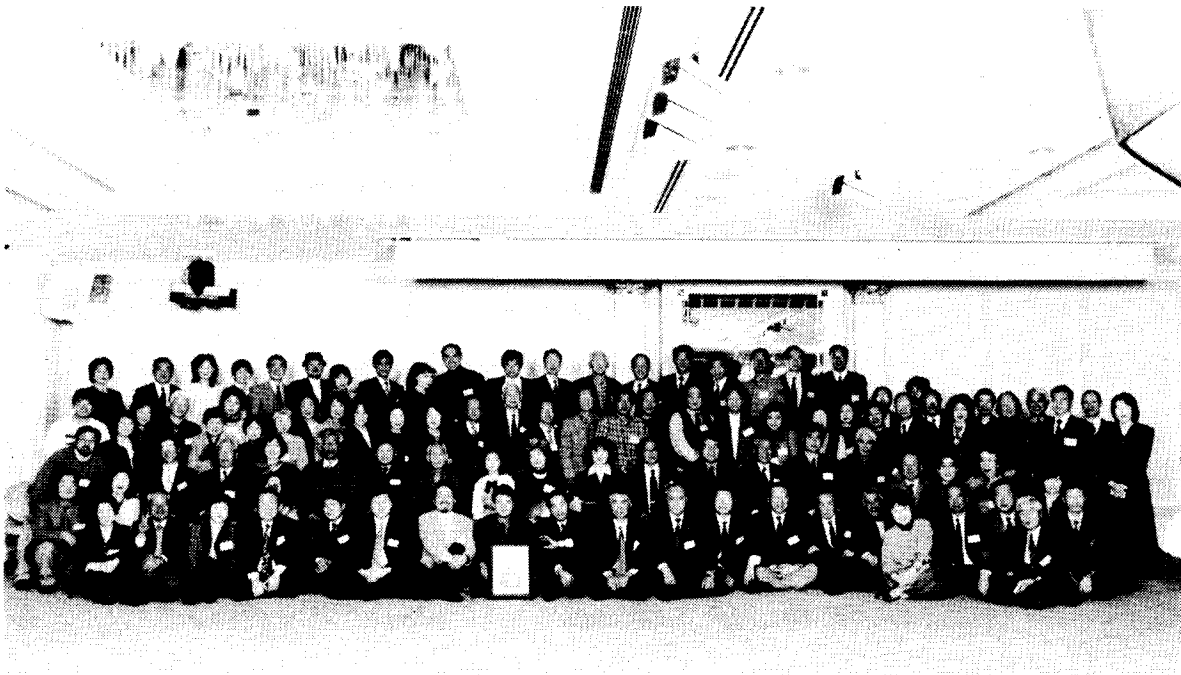
3月20日(土)16:00、ホテルセンチュリー21広島、桃山の間で、「高見和成さんを偲ぶ会」が催される。正面に遺影、かたわらに遺品の茶器、酒器、ぎんなんの焙烙、陶製ジョッキ、ワインボトルなどに著書、記録集、また、山を描いた藍染めの扁額。

山原玲子さんの司会で始まり、遺影にスポットライトを当てて、黙禱、樋野達夫さんの土笛演奏。平田恒雄代表のあいさつ、林泰英さんによる遺稿・追悼集の編集意図、経過報告があり、谷野彪さんの献杯で第1部を終わる。

B. G. Mは岸洋子のシャンソン。スピーチは私からで、大山で雪崩に遭って下りたところが一向が平、一向と書いて、「ひたぶる」と読み、一途に、ひたすら、集中するなどの意味、神出鬼没の彼らしい下山地だったこと。夜明けに電話してきて「先生、タッタ、タッタ」という叫び声、私はすぐに事の次第を察し、かのシャーベットみかんをいただいた不動明王の御利益かと彼の笑顔を想ったこと。遺稿集の妻への手紙は圧巻、今後は西方十億土の宇宙のかなたから、メールランナーならぬ光ファイバーで送ってくるだろうなどと話す。

次は圓田慶爾さん、優秀な技術者であり、彼の人柄から顧客の信望は抜群で、「広島重電サービス(株)」の車が各地を駆け巡ったこと。また、経営者としての思いも述べられ、終わりに「高見の大バカ者」と絶叫された。続いて京才昭さん、出版のこと、出西窯のこと、

ワインボトルの竹籠を結ぶ組紐を徹夜で編まされた京才夫人の話など。最後は添田公子さん、みみずくの藍染めTシャツを愛用してくれたこと、桜の木灰を調達してくれたこと。三知子さんに藍染めの日傘を贈る一幕もあった。



### 高見和成氏を偲ぶ会 1999年3月20日

\*偲ぶ会の参加者一同で記念撮影。(撮影；児島 修)

友人紹介では、平田代表から東京の神長幹雄さん、平岡誠一郎さん、須藤忠臣さん、中村忠敬さん、福岡の池辺勝利さんを、吉村千春世話人から京都の須藤建志さん、宮川清明さん、阪本公一さんをそれぞれ紹介。

続いて、RCC提供によるナムチャバルワの記録ビデオが上映され、氷壁に行きなずむシーンなど、過ぎし日の感動を新たにする。

終わりに近づいて、奥富久枝さんから三知子さんに花束、加藤真理さんから文子さん、千世さんに日記帳を贈って、三知子さんの謝辞。世俗の間尺に合わない、愉快で魅力的ないい男だったという意味のことばがあった。

閉会のあいさつでは、吉村千春さんから、文子さんは広島県立女子大学に、千世さんは鈴が峰女子中学校にそれぞれ合格されたことを報告して、健やかな成長を皆で見守り、応援しようと結んだ。

その後、味香友子さんのソプラノ独唱「四季の歌」、続いて「雪山讃歌」を皆で息をつ

ませながら斉唱。記念写真は児島修さんが元気に動き回って撮る。司会者のことばで閉会したのが、19:00。参加者96名。

二次会は思い出深い流川「鳥八」に20数名、三次会は山田雅昭さんの案内で「窓」へ数名。宿泊組は「法華クラブ」へ。

\*種村重明(たねむら・しげあき)1931年生まれ。広島県山岳連盟会長。73年広島大学ヒマヤン学術調査隊副隊長、97年カンパ・ヒマヤン・カガ・タル、98年カガ・フスタン・トレッキング

## 2、日本山岳会 98 年 年次晩餐会に出席して

泉尾 忠

晩餐会の式次第とその状況については、会報「山」99年1月号(No.644)に詳細が載っており、今更ここで述べても重複する事になりますので、会員の出席者615名の内24支部からの出席者176名について、出席者名簿から拾って、出席内訳を分析してみました。

出席者5名以下の支部	青森、秋田、山形、宮城、石川、福井、山陰、広島、東九州、福岡、熊本
” 6～10名の支部	北海道、岩手、福島、富山、山梨、静岡、東海、岐阜
” 11～15名の支部	宮城、越後、関西
” 16～20名の支部	信濃
” 20名以上の支部	京都

以上のようになりました。ちなみに広島支部からの出席者は3名(青木、木村、泉尾)でした。

\*泉尾忠(いずお・ただし)1914年生まれ。JAC広島支部初代支部長。広島の「ロッククライミング」の先駆者。37年4月三倉岳下の岳ノ丸・フミニールト、上の岳ノ丸・フミニールト初登

## 3、日本山岳会広島支部文化部行事報告

西条の歴史散歩 ～山と酒蔵を訪ねて～(竜王山登山と賀茂泉の酒蔵見学・親睦夕食会)

兼森 路子

(第一部)

平成11年2月6日(土)JR西条駅に集合。案内の方と20名程で10時30分、竜王山に向けて出発。雪の残る畦道や裏道を抜けて、お酒を祠ってある神社に参拝してから里山、竜王山に登る。

昔、喝水した時、竜が池から天に昇り雨を降らせた。その水が湧出る山が竜王山で、水

を守る山。水は酒造りには欠かせない。酒造りの守り神の山でもある。

頂上には雪が残っていて、山頂から見渡す西条の街も白く輝いて美しい。雪を渡ってくる少し肌寒い風の中、東屋風のところで風をよけながら、ワイワイ楽しく昼食を食べる。甘酒あり、ラーメンあり、うどんあり、コーヒーありで、皆分け合って幸せな連帯感に浸った。

帰りは国分寺跡を訪ね、文化発祥の地に思いを馳せた。



\*前垣氏を先頭に竜王山から楽しく談笑しながら下山中の会員たち（撮影；紺野 昇）

（そしていよいよ第二部）

本日の文化活動の粹である、賀茂泉本店に集合。26名に増え、泉尾支部長も参加された。

杜氏の解り易い説明や、蔵とお酒が出来る行程を見て、お酒造りを五感で知ることにより、日本酒をまた違った感覚で嗜めるのでは…。水とお米の種類でお酒がわかる。

「ドイツ人はビールを語り、フランス人はワインを語る。日本人はどれだけ日本酒が語れるのか、日本酒は日本人の文化であるはずだが…。」という御亭主の言葉が心に残りました。

（いよいよ待ちに待った第三部）

文化の香りに溢れた古いお部屋に通され、重森三玲氏作の枯山水のお庭を拝見させて戴いて、寒庭に白砂敷きつめ酒づくり、山口誓子の句碑が心にしみた。

お母さまと奥様心づくしの手料理と猪鍋、それに美味しい日本酒のお持て成しに身も心も暖かく幸せになった。

こんなに素晴らしい時間を下さった賀茂泉の方と、こんな素敵な空間を共有できる仲間達に乾杯！！

嬉しい嬉しい一日でした。



\* 夕食会で、会員の前で挨拶される名酒「賀茂泉」蔵主の前垣寿男、日本山岳会広島支部員

(撮影：紺野 昇)

#### 参加者名簿

##### 山と賀茂泉

青木巖、山田雅昭、山田優子、兼森志郎、兼森路子、吉見良一、木村知博、藤川昌寛、鈴木康仁、佐々木弘磨、前垣寿男、紺野昇、豊田和司、堀内輝章、敷廣千枝、三輪克子

##### 賀茂泉のみ

泉尾忠、種村重明、里信敏行、吉村千春、以上 JAC (清水正弘、金子博啓、豊原正尚)

## 4、支部員海外山行動向

### (1) ミニヤコンカの咆哮

吉村 千春

昨秋(1998年)、3人の仲間と中国四川省にあるミニヤ・コンカ峰に挑んだ。9月22日に関西空港より出国し、11月1日に帰国した。素敵な仲間達との25日間の登山は頂上は残念ながら踏めなかったが、思い出深い遠征となった。

以下に、登山の概要を記したい。

#### エピソード

1992年夏、四川省にある秀峰、四姑娘山の南壁より頂上に立つことができた。手つかずの大岩壁に新しいラインが引けた喜びに、7人の侍達は酔った。

帰り際、其の時の連絡官から「次はミニヤ・コンカですね」と水を向けられた。

帰国後、桑原総隊長とミニヤ・コンカ峰の2万5千分の1の地図とにらめっこする内、

「未踏の南西稜に可能性が有るのでは」と希望を抱くようになった。2年後1994年のゴールデンウィーク、ミニヤコンカの西面、子梅峠(4,600m)に桑原さん以下7名が立ち、大パノラマに驚嘆の声を上げた。その後、他の仲間と別れ、同じ広島山の会の新山さんとコンガ寺まで入ることができた。三日間快晴が続き、燃えるような夕焼けに染まるミニヤ・コンカに堪能し、納得できる写真をものにした。

その年の11月16日、JAC京都支部に誘われて、其の時のトレッキングの様態をスライドを交えて講演を行った。翌年の春もまた、南西稜までの登路の発見を目的とする偵察にゆくことにし、偵察隊に同行するトレッキング隊も組織した。地元、中国新聞で公募したり、JAC京都支部からの参加者で22名の大世帯になった。中高年の方が多かったので、心配な高度障害のレクチャーを重ね、医師でもあり、高所医学に詳しい原真(はら・まこと)さんにも御同行願うこととなった。

今や、トレッキング旅行専門会社のドル箱になってしまった感のある四姑娘山周辺と違って道路事情が悪く、宿泊先など不自由は多かったが、地元の子ベット族とのふれあいに心暖まり、なににもまして、コンガ寺からのミニヤコンカの勇姿に感動して全員無事帰国することができた。

その後、1997年の秋に遠征を実施することとし、準備に取り掛かった。1996年の暮、私は雲南省にある梅里雪山に遠征した。帰国したちょうどその日に、こともあろうか、遠征メンバーで大切な友人の僧侶、宗光さんが、遠征トレーニング中、八ヶ岳の中山尾根で墜死してしまった。翌年の遠征実施にあたり、私は、そのショックと共に、出産する妻のこと、会社の留守対策のことなど、迷いに迷い、参加を取り止めることにした。

結局、1997年の秋、須藤隊長、宮川さん、川奈部君の三人で挑むことになった。天候が

悪く、人食熊の出没などで北西稜に到達したところで、退却となった。

(つづく)

\*吉村 千春(よしむら・ちはる) 1959年広島市生まれ。AACK、広島山の会所属。89年コンカール北稜初登攀。92年四姑娘山南壁初登攀。

(2) カナダ・バフィン島遠征 ～1998年夏～ (下)

新山 まゆみ

期 間 出発 6月30日 先発隊(名越・宮重)  
7月6日 本隊(山本・井上・新山)  
7月19日 後発隊(両叡・木原・溝手)  
帰国 8月16日 後発隊  
8月31日 先発隊・本隊

場 所 カナダ北極圏 バフィン島 アウエイットトゥク国立公園保護地区  
フリーガ I, II峰北壁

メンバー I峰パーティー

- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| ①隊長・渉外・クティクス・記録・通信 | 名越實(JAC 広島支部・広島山岳会) |
| ②登攀リーダー・装備・クティクス   | 山本茂樹(シャープ山岳部)       |
| ③食料・交通・輸送          | 宮重栄作(広島山岳会)         |

II峰パーティー

- |                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| ④登攀リーダー・クティクス・装備・梱包 | 両叡輝正(広島山の会)           |
| ⑤会計・梱包・環境・医療        | 木原めぐみ(広島山岳会)          |
| ⑥輸送・交通・渉外           | 溝手康史(広島山岳会)           |
| ⑦梱包・環境・食料           | 新山まゆみ(JAC 広島支部・広島山の会) |
| ⑧医療・会計・食料           | 井上直子(広島山岳会)           |

- 目 的
1. 北極圏における大岩壁のルート開拓
  2. ウィーゼル谷を含むペニー氷床地域の探査
  3. 新生ヌナヴェット準州との国際交流

7月18日 登攀装備を取付まで運ぶ。パーティーの編成は、I峰パーティーはカプセルスタイルの登攀を目指しているため、彼らがゴーアップするまで、または、後発隊が到着するまでは、I峰パーティー(山本・宮重)、II峰パーティー(名越・井上・新山)で登る。結果的にはゴーアップよりも後発隊の到着が早かったので、後発隊がベースに合流すると、本来のI峰パーティー(名越・山本・宮重)、II峰パーティー(両叡・木原・溝手・新山・井上)のスタイルになった。私達II峰パーティーは後発隊が着くまでに2人ずつで組んで3人がそれぞれ



2回づつリードして、3ピッチ伸ばしたということだ。私達はフィックスロープを使って少しづつ上に伸ばしてゆく登り方をした。

13:40 登攀スタート リード名越 ビレイ井上

取付の広いチムニーから登り始める。

20:00 ベース帰着

7月19日 15:00 登攀スタート リード井上 ビレイ名越

21:30 ベース帰着 本日1ピッチ目終了

昨日の終了点から振り子で右のきれいなクラックに渡る。

7月20日 12:30 登攀スタート リード新山 ビレイ井上

21:00 ベース帰着

引き戸が外れたような形で、縦にした大広間と言える位大きな浮石を一つ登る。

7月21日 全員休養日とし、ベースをアスガード寄りに150m位移動する。

理由は、①氷河の融けた水の溜まった泉が近い②両ルートがテントの中からも顔を覗かせるだけでよく見える③日陰になっている時間が短い場所、ということだった。しかし、休養日とは名ばかりで、全隊荷を人手で運ぶのは大変だった。

7月22日 12:00 登攀スタート リード井上・新山 ビレイ新山・井上

20:30 ベース帰着 本日2ピッチ目終了

手の切れそうなきれいなハンドサイズのクラックを2人で半分づつリードする。

7月23日 12:00 登攀スタート リード名越 ビレイ井上

22:00 ベース帰着 本日3ピッチ目終了

今日のような被ったところは、75ちゃんの出番だ。3ピッチ目の終了点は、大きなテラスで、3人位なら横になることが出来そうだ。

7月24日 8:00 後発隊ベースに合流 井上・新山は昼からルート整備

3ピッチ目までは、はっきりとルートが読めたが、ここから中央の剣の所までのルートが判りにくい。いい時に頼りになる後発隊が合流したものだ。

7月25日 7:00 登攀スタート リード両叟 ビレイ新山

10:00 雨のため早くにベース帰着

両叟さんは、この素晴らしい壁を目前に、まるで引き綱を放たれる前の猟犬のように、はやる気持を押さえ切れない様子。後発隊が到着するまでの生活のペースより3時間も早く起きて取付きたいと言う。結果的には、早く起きて行動する方が、暖くなる午前中から昼過ぎまでが天気も安定しているようで、作業がはかどり、合理的にピッチが進んだと思う。いざ4ピッチ目のスタート。まず目の前の大きなフレークに薄刃のハーケンを打ち始めるが、「コンコンコンコン、ゴボ」という石の浮く音にあわててハーケンは止め、

ボルトを打ち、仕切り直し。

Ⅱ峰パーティーのチーム編成は、後発隊が到着したので、名越さんを本来のⅠ峰パーティーにお返しし、両叟・新山の2人と木原・溝手・井上の3人で1日ずつ交替して登ることにする。

7月26日 12:30 登攀スタート リード木原 ビレイ溝手

17:00 ベース帰着

ルート取りが読めず手間どる。

7月27日 雨で沈殿

7月28日 テントから何度も顔を出し壁の様子を見るが、夜半までの雨で壁がすっきりしない。

14:00 登攀スタート リード両叟 ビレイ新山

17:00 雨のためベース帰着

7月29日 11:00 登攀スタート リード溝手 ビレイ井上

18:00 ベース帰着

休養日でベースにいと、アスガードにフリーで登りに来たと言うアメリカ人2人パーティーが立ち寄る。コーヒーを飲みながら、しばしの間(手に大汗をかきながら)得意?の英語で話しがはずむ。彼らは、自家用のセスキ機でアメリカから来たと言う。

7月30日 雨で沈殿

7月31日 雨で沈殿

降り続く雨の中、ケベックから来たと言うカナダの青年が寄ってくる。

8月1日 雨で沈殿

連日の雨で、クレバスに作ったトイレの縁が柔らかくなり、隊員の一人が片足を中に落としてしまう。トイレでは使用済みのロールペーパーも焼却するのでクレバスの中は、ほぼ完全に水に浸かった〇〇〇だけ。雪解けの冷たい水で懸命に足を洗う隊員でした。

8月2日 7:30 登攀スタート リード両叟 ビレイ新山

17:00 ベース帰着 本日4ピッチ目終了

6日間続いた雨のせいで、この薄く被った35mに何と、5日間も費やしてしまった。

8月3日 9:00 登攀スタート リード木原 ビレイ溝手

19:00 ベース帰着

8月4日 7:00 登攀スタート リード両叟 ビレイ新山

20:00 ベース帰着 本日5・6・7ピッチ目終了

7ピッチ目振り子で脆いクラックを取りに行く所が、高度感もある素晴らしいシャッターチャンスだったが、ひどく緊張するビレイで手が離せず、写

真に撮れない。私の目によく焼き付けておこう。シェフの大テラスにようやく辿り着く。ここでルートの半分というところか。

8月5日 I 峰パーティー 10日分の水と食料を持ってゴーアップ。

II 峰パーティー

10:00 登攀スタート リード溝手 ビレイ井上

18:30 ベース帰着 本日8ピッチ目終了

起伏のある大テラスをトラバース。荷揚げに手間取る。

8月6日 8:00 登攀スタート リード両傘 ビレイ新山

20:00 ベース帰着 本日9・10・11ピッチ目終了

9・10ピッチ、双眼鏡で見るとコーナーにばっちりクラックがあるはずだったのに、ない。私なら怖さでボルト連打になるところ、両傘さんはフリーでランナウトする。早く何かボルトかハーケンを打ってくれー。

10ピッチまでで400mのフィックスロープを使いいきり、11ピッチからはメインロープで伸ばすことにする。

下降時には3ピッチ目のフィックスロープが滝の飛沫で凍り、氷がバリバリと音を立てて飛び散る。

今日は一日中シェフの大テラスから下は霧の海だったが、上部の行動は青空の中でとても気持ちよかった。しかし、帰りの取付からはガスの中で、たった15分の帰り道で踏跡を見失いベースに戻れなくなってしまう。こうなったら仕方ない、一度は納めた無線を出してベースを呼び出す。

「オーイと呼んで頂だい。」無線に呼んでも解りません。外に出てオーイと呼んでね。無線のスイッチを切っていないでよかった。

8月7日 8:00 登攀スタート リード井上 ビレイ木原

23:30 ベース帰着 本日12ピッチ目終了

昨日の帰り同様、3ピッチ目のフィックスロープが凍ってユマーリングが怖いので、寒い日陰で3時間位待機している。白夜がそろそろ終わり、夜のテントの中ではヘッドランプが要るようになってきた。

今日は冷たい風の吹く、雪の舞い散る寒い一日だった。

8月8日 7:00 登攀スタート リード両傘 ビレイ新山

16:00 ピーク着

16:30 下降開始

21:30 ベース帰着

今日は勝負の日。13ピッチ目、脆いボロボロの岩屑の詰まった、動く度にビレイヤーに小石が当たるピッチをよくも、あれだけ誤魔化しながら登ったものだ。ひとつ大きな落石が出れば、それに連られて大崩壊が起きて

も不思議ではないひどい所だ。ロープがスタックしやすく、どうしても短

